

郷土誌だより

いまむら

特集・教育

No. 9
 編集委員会
 今村誌編集委員会
 発行
 今村誌刊行会
 瀬戸市平町3-142
 電話 (84) 0840
 コミュニティセンター内

学校の始まりと 今村の学校のあゆみ

明治のはじめ、政治の中心は東京に移って学校計画も東京を中心に進められていたがこちらでも、尾張藩が名古屋藩になり更に名古屋県から愛知県へと変っていく動きの中で、学校計画は一貫して着実に進められていた。

名古屋時代、明治四年九月（一八七一）に義校の設立がよびかけられた。

義校Ⅱ小学校の前身をなす簡易な初等学校。一般住民の協力により主として寄付金により設立。明治四年名古屋に創設され明治五、六年頃愛知県岐阜県で多数設立、後に小学校となるⅡ広辞苑Ⅱ

愛知県と改まった明治五年五月には「学問のさとし」が公布され、県内各地に義校が設けられるようになり、名古屋では第一義校から第三五義校まで開設、春日井郡では五年四月に高蔵寺村ほか六ヶ村で、また、杣掛村でも開設さ

れるなど、明治六年には県下で四百校を数えるに至った。

先に「広辞苑」からも引用した「義校」というのは、寺小屋や私塾のような個人経営と異なり、新しい時代の要請を先取りして町や村の有力者が協力し、一般庶民の子弟の学ぶ、謝礼のいらぬ教育施設として一村一校の義校を設けよう、というのがそのはじまりであった。

こうした動きのうちに、明治五年八月、政府は学制を公布、県ではこの「義校」を学制の小学校に代るものとして公認し普及発達を図った。

愛知県が学制に基いて学区を定め小学校の設立に着手したのは明治六年五月からで、県下を八中学区にわけ、人口六百人に一校の割合で六百校を計画したが結局、年末までに六五〇校に及んだ。

今村では、「第三番中学区内五八番小学校效範学校」と

いう校名で明治六年五月九日開設の記録を見つけた。

県の学校づくりは、中学区に「学区取締」という役人、その補助機関に「学校幹事」村には学校幹事試験、学校係等の小学校世話方において学校の管理に当らせた。

記録によれば、青山佐左エ門さんは学校幹事試験、伊藤磯七さんは学校係であった。

明治十年八月、愛知県は県下各小学校の沿革を調査したが、その調査書が現在、愛知県図書館の郷土室に保管されている。「明治十年小学校沿革簿」と表書きのあるこの文書は、今村文書学校関係分を理解する上に大いに役立ったので、ここに今村学校分の全文をご紹介します。

明治十年小学校沿革簿

第百四十五番小学今村学校

一、位置 第三区春日井郡今

村二三四八番地

民有地 面積四一

四坪 地税二四二

〇錢七厘

但明治九年三月同村

六三番屋敷慶昌院
ヨリ移転

ニ、連区 今村 二二〇戸

三、設立 明治六年五月九日

四、新築 明治九年三月廿二日

五、夜学 明治七年四月十五日

六、校名 明治九年七月八日

七、教員 訓導一名 訓導試験

八、学費 明治六年五月ヨリ

同八年十二月マデ

賦課、同九年一月

ヨリ年賦寄附金ヲ

モツテ支払イ

授業生一名

一名ノ処今ハ三等

校ト改ム

效範学校ヲ今村学

校ト改ム

資料提供者ご芳名

瀬戸市役所都市計画課様

效範小学校様 慶昌院様

青山佐太郎様 横山春一様

河村周一様 (品野)

水野 呆様 (瀬高)

須崎好一様 (尾張旭)

村田秀雄様 (水無瀬中)

横山亮一様 (名古屋市緑区)

效範学校仮校舎は

慶昌院だった

今村文書の「新築前の分、学校所入費帳」(明治六年五月)という書類に、

①琉球三〇枚 四円六三銭

②学校所取繕用釘、手間代 二円五〇銭

③板五間床張り代一円七五銭とある。合計八円八八銭。

これが仮教室を作った費用と思われるものであるが、前頁の沿革簿③設立は明治六年五月五日 ④新築明治九年三月二二日 と記されていて、(3)から(4)の間三ヶ年はどこに学校があったのか：今まで不明であったが、その答も沿革簿に出ている。「但明治九年三月同村六三番屋敷慶昌院より移転」(1)の但書II といふわけだ。

当時のお寺は唯一の公共施設であったからこれは理解できる。又、別の文書に、当時の慶昌院住職、十三世巖耕雲和尚は明治九年十月「権訓導に補せられた」とある。

当初は寺子屋の師匠や土地の有識者が教師に採用されていたが明治九年六月以後、教師の資格や俸給が定められ、訓導、権訓導、授業生(一等、四等)の職名ができた。愛知県教育史は伝えている。

なお、慶昌院には三人の徒弟がいたが、第一弟子の「市刃正学」という人の名が「效範小学校百年のあゆみ」の歴代校長欄の最初に出ている。(明治三三年以前は校長とい

校舎の新築は效範が一番

愛知県教育史によると、学制が施行されても直ちに新築とはいかず、寺や民家等の借用が多く明治二〇年頃までは新築の機運も盛り上ってこなかったようであるが、今村の場合には非常に速いテンポで進められていたことが、今村文書の中の次の資料から判る。

- ①学校普請日記帳 明・8
- ②開校御祝儀受納帳 明・9
- ③学校頼母子人銘帳 明・8
- ④学校新築精算書 明・16

う呼称はなく、首席教師といっていた) 又、三番目の弟子「香山禅哲」という人について、「学校普請日記帳」に、明治八年八月一三日、小牧の養成学校分校(教員再教育所)に出張したため一円二五銭の手当を支払ったという記事があり、「沿革簿(7)」の三等授業生一名、というのにあてはまるのではないかと思われる。

①の日記帳の最初に、金百円也旧水野陣屋(代官)宅棟、西小門並に便所とあり、一月七日 コボチ初め 大工一人、日雇方五人外に手伝い八人世話役十一人、人足九八人夜番人足二人

などと一月十日まで記録されている。七日から十日まで四日間の人足を集計すると、今村から二六一人(八〇%)狩宿村から一五人(四・六%)

井田村から一九人(五・九%) 瀬戸川村 二〇人(六・二%) 美濃之池村 八人(二・五%) 計三二三名となっている。

取りこわしから運搬・移築工事については金銭の出納関係の記録から読みとれる。棟上げは明治八年九月二五日から二七日の間に行われた

ように、祝儀代、マキ銭色紙共、等の費用が記してある。竣工披露は翌九年三月二二日に行われ、酒八升、祝儀一円七四銭と記載してある。

④の精算書から拾うと、
支出合計三八二円六九銭
家購入 百円〇〇
土地代 十五円〇〇
材料代 九八円三四銭
人件費一一七円七一銭
その他 五一円六四銭
充当収入金
合計 三八二円五八銭

内訳
頼母子金 二四五円四二銭
建築残材処分 九円七六銭
雑収入八件一二七円四〇銭
建築費の寄付金が頼母子講という仕組みで集まっている。故青山政五郎氏の話では耕

雲和尚は経済にも通じていて頼母子講を広めたというが、③の人銘帳には明治八年十二月にまとめた二二二名の人名と金額が記されているが、④の精算書の日付が明治十六年とはなれているのがちょっと気になる所である。

ともかく、新築は大変な事業であった。十一人の世話役は費用を立替えたり多額の寄付金(頼母子金の六割)を出したり、村人たちへ協力をよびかけるための寄り合いに奔走もされたことだろう。

建設位置は今村二三四八番地、敷地四一四坪は、地籍図から城屋敷の青山田七さんの所有地であって、後に十五円で買収したものであることがわかった。現在の平町三丁目二番五番地に当る。

やがて、狩宿学校の開設で效範学校は今村学校と改称、八白村の成立と共に八白尋常小学校、旭村と合併して旭第二尋常小学校と、次に名前を変えながら現在の平町一丁目(本紙四号参照)へ移転、大正十四年瀬戸町への合併を

機に歴史ある最初の校名「效範」を名乗って「效範尋常小学校」となった。

現在地への移転は昭和五年で、当時は北脇二四三八番地といったが、昭和十八年の町名設定で「效範町」という町名が生れ、效範町一丁目一番地、ということになった。

学校費は住民負担

明治五年の学制は、学校を「人々自らその身を立て其産を治め其業を盛んにするも」という考えから受益者負担の形をとり授業料をとることを原則とし、小学生一人月額五十銭。但し納付困難な者は半額でもよいとしたが、東春日井郡史によれば実際に徴収していたのは三八校中僅か四校で、授業料収入が学校費として不足の場合は逓区がこれを負担する仕組であった。

六八円六九銭。この財源は御下り金二六円二九銭、寄付金二四一九銭を合わせても尚一八円十一銭不足するため、前頁沿革簿八のように逓区内各村へ高割×戸数割で計算し、次のように賦課した。	○今村 二一〇戸	一〇円四八銭七厘
	○美濃之池村 二九戸	一円三九銭七厘
	○狩宿村 五八戸	五八戸
	○瀬戸川村 四二戸	二円一九銭九厘
	○井田村 五六戸	一円七〇銭六厘
	合計 三九五戸	二円三二銭一厘
		一八円一一銭也。

このように住民に負担を合わせる一方で子女たちの就学を促進することが大きな課題になっていた。

明治七年の第二中学区内平均値にみる就業率は三八%、しかも男女別の格差は大きく男子就学率五五%に対し女子は一九%しかなかった。

明治十二年、学制を廃して教育令が公布され、町村が小

学校設置単位となり、町村費で設置する学校を「公立」と呼ぶようになった。

やがて、明治三三年になると「市町村立小学校国庫補助法」が公布され小学校は原則として授業料を徴収しないことになったが、尾張旭市誌によれば八白村尋常小学校時代に月額三銭の授業料を徴収したことがあったという。

青年団雑考

早稲田柳右エ門

（今村之青年会本紙第二号参照）
 創刊号所載・昭和十年）
 八抜すいV：瀬戸市今村青年団と申しますと何だか新しいように思われますが、本団の創立されたのは遠く明治廿八年の十一月三日、明治天皇天長節をトして、日清戦争戦勝記念に発会式を挙げたのであります。

その当時、まだ青年会というものがなかった頃で、随分乱暴な時代だったそうです。只今の效範小学校の前身、八白尋常小学校に灘波田篤卓と

いう首席教師がおられて、青年の風規矯正を叫んで、斡旋の基礎を作られたと云うことであります。

当時の記録によりますと、毎月十回の補習教育（夜学）農業改良の研究等、いろいろの事業を行い、規律の厳格であったことは、到底今日の比ではなかつたのであります。

（中略）創立以来の精神と努力をつづけた功績が認められて明治四二年四月三日初めて愛知県青年大会が碧海郡安城町の農林学校講堂で開かれ、た席上「多年補習教育ニ努メ実業的施設ノ見ルベキモノアリ」という事由で第一番に表彰せられる名誉を担い、賞金二十五円を授与されています。表彰された当時の青年会長は稲垣兼四郎翁と承ります。中部日本最古の青年会だというので、県内は勿論、県外からも視察があったという話でありました。（後略）

終面の都合で全文はご紹介できないが、発表当時の青年団長は玉置巖さんであった。

青年教育も

小学校の所管

「明治六年学校所入費帳」の、ランプ五個、石油一斗五升、提灯一〇帳、ローソク、火鉢八個、炭五俵、などの買物は、沿革簿五の「夜学明治七年四月十五日開設」とあるところから、これは夜学開設のためのものと判った。

夜学は学齡外の村民を対象に開いたものと考えられるが沿革簿で調べると、第三区内では七九小学校中、杏樹・小木・今村の三校のみが夜学を開設していたが、第二区には開設校が可成りあった。

また、学校所入費帳の中に新聞誌五冊、二五銭の記録が五ヶ所もあって何のことかよく判らなかつたが、県教育史によると、「民智を開明し、布告、布達の滲透を狙って」明治七年から諸新聞の購読をすすめる、教師は毎月定日に講義をするようにとの達しが出ていたことが載っており、そのための新聞代とわかつた。

〔連載〕

広長公物語 (9)

(三) 男たち

続 その一

都での覇者決定戦はドロームに終り、応仁九年、地方戦のやり直しの為、守護達は郎党を引き具して国元へ急いだ。

「久し振りにおっかあに会えるぞ。お袋の顔を早う見たいなあ、おらアのたんぼはどうなっちよるじゃろう、稲葉山(岐阜金華山)も白い雪が降ったろうなア……」

背に大きな荷物、重い包、槍や長刀にぶら下げている百姓上りの郎党達は米の袋が土産である。危い所を命拾いした者は地藏様を背負っている。老父への土産に、都の酒樽をじゃぶじゃぶさせ乍ら背負っていく。歳経るうちに都妻を子まで連れ添っている者、公家の宝を懐にしている者も。数千という長い列は近江から美濃路へと続いた。

西軍の副将格土岐成頼(シゲヨリ)も京の館に火を掛けて、革手城に大きな土産を運び込んだのはその年の暮であった。

將軍義政の実弟義視(ヨシミ)親子(註)を将来賊と見込んで担いだのである。提灯持の目的は、都に近いことを利用し幕閣に強い発言権を確保することである。義視親子が成頼に担がれては、幕府として面白くないのは当然である。美濃の背後を牽制する為

に翌文明十年二月廿一日、義尚(ヨシヒサ・註)の名を以って小笠原左エ門佐宛、使者は信濃国にとんだ。

ここに土岐成頼、都から運んで来た花鳥風月の嗜みもそこそこ、兜の緒を締めた。先ず二男定頼を大桑城に配し、妻木頼照父子をして東美濃を固めさせた。美濃の斉藤

と天下にその名を得た妙椿、その猶子利国を左右に成頼は築を練る。尚妙椿はその年、尾張清須城の内紛に兵を進めて介入している。行動的武將妙椿が建在のうちは美濃国は安泰であったが、翌年家督を利国に譲りその翌年卒去した。余語が長くなったが、当時の天下及び周囲の状況を説明する為紙数を費したことを許されたい。

話を戻す。桑下の城に永井民部は美濃の情報を手に入れ悶えた。宿敵斉藤妙椿(7・8号参照)が構えている限り美濃今須の奪回の術はない。国々の力のバランスは日毎に変わる。東西の情勢を知ること以外に今、術もない。稲垣太郎右門は今村を逃亡してから一途に永井の内偵として働いた。「広長に勝った時は右門に今村を任すぞ」と民部の口

約束に右門は今村の詳細を足で運んだ。文明十二年二月、斉藤妙椿の往生に雀躍した民部は愈々時来ると攻勢の準備を急いだのである。

だが天下に土岐成頼の備えは蟻の入る隙もない。美濃への直進が到底おぼつかない事を知る民部は先ず足元から今村を攻撃する腹を決めたのであった。さて、安戸坂決戦の結果は右門の努力に何一つとして報いられるものはなかった。生きる道を失った右門は万徳寺の円林上人のもとに、今までの悔いを改めた。上人の言葉がかかる。「お前は今生きてゐる。今生きているのは誰の為に生きてゐるのじゃ。なあ右門よ、お前は走りすぎた、走っている中は駆け出した、走っている、物にならんのじゃ、歩け、歩いて舞台に立て、そしてしっかり立った時がお前の榎舞台じゃ、わかっただのう、右門」と。

右門は円林上人を中立として、母奴香多、姉お福の取持

ちにより、父主膳の勘当も解けて今村の為に力をつくすこととなる。

(註) 義視親子、義尚の事、名門日野富子が將軍義政に嫁いで子がなかった。義政は実弟の義尋僧正(浄土寺門跡)

を強引に還俗させて次期將軍を約束した。処が富子が嫁いで十年目に義尚が生れた。富子が山名宗全を後楯に義政の後継としたのは人情である。応仁の擾乱も之が一つの発火点となった。義視は將軍職を義尚に譲ったが義尚近江六角攻めに病死して義視の子義植(ヨシタネ)十代將軍となる。(参考) 岐阜県史、土岐累代記、尾参郷土史、愛知県史。(物語を進める上に、血族縁戚関係はフィクションである事をお断りします)(白水郎)

後記編集

○名古屋の横山亮一さんから旭第二尋常小学校の想出と題する手記を頂きました。ここには掲載できませんでしたが本の方に全文をのせさせて頂きます。〇八月は終戦記念に徴兵を取り上げてみます。